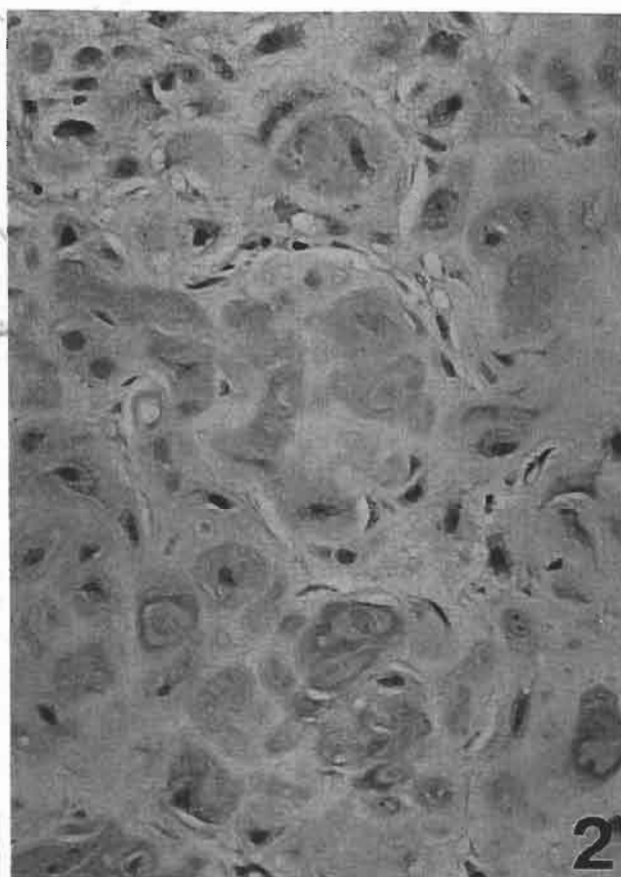
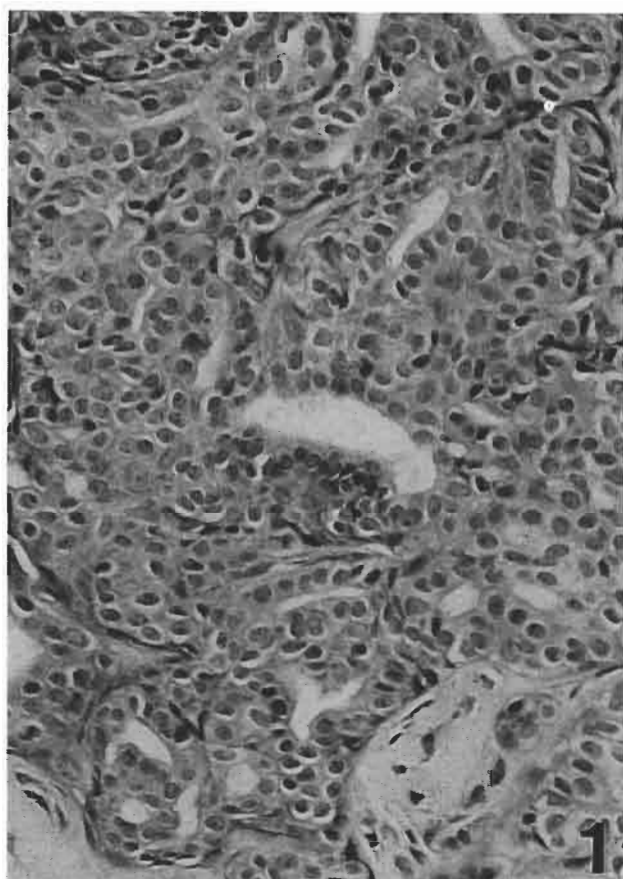


# 犬の皮下腫瘍

日本大学農獣医学部獣医病理学教室出題 第34回獣医病理学研修会提出標本No.612



**動物：**犬，ヨークシャーテリア，雄，13歳齡，体重2.5 kg。

**臨床的事項：**1992年3月に右内股部皮下にクルミ大の腫瘍が発見され，神奈川県内の某動物病院にて，外科的に摘出された。

**肉眼的所見：**腫瘍の大きさは約3.5×3.5 cmで，小塊状をなし，表面の一部は潰瘍を起し，出血していた。剖面は，灰白色髓様で，褐色出血部を伴っていた。

**組織学的所見：**大小不同のクロマチンに富んだ暗調な核をもった腺上皮様細胞が不規則な管状，腺房状をなして増殖(写真1，HE染色，×300)し，核分裂像も認められた。これに豊富な間質結合組織及び軟骨様組織の混在を伴っていた(写真2，HE染色，×300)。トルイジンブルー染色で軟骨様部分はメタクロマジーを呈し，アルシアンブルー・PAS染色ではアルシアンブルーに青染した。管腔内容物はPAS陽性を示した。マッソン・トリクローム染色では，腺腔組織の周囲に，豊富な膠原線維が束状をな

して認められた。

**免疫組織化学的所見：**抗S-100蛋白抗体は，軟骨様部分の周辺部及び間質の一部で軟骨様細胞が陽性を示した。抗ケラチン抗体は，腺細胞のみが陽性を示した。抗SC (secretory component) 抗体に対しては，多くの腺細胞が陽性を示した。

**診断：**いわゆる皮膚混合腫瘍(so-called mixed tumor of the skin)

皮膚混合腫瘍の特徴は，上皮系組織である腺と間葉系組織である軟骨の双方の増殖がみられることで，ヒトでは唾液腺混合腫瘍，犬では乳腺混合腫瘍が類似の病変として知られている。皮膚混合腫瘍の由来についてみると，ヒトでは汗腺上皮由来であることが有力となっており，間葉系組織の増殖は，二次的な反応であるとされ，軟骨様汗管腫(chondroid syringoma)とも呼ばれている。本例も，組織学的所見より汗腺由来と考えられた。また免疫組織化学的検索において抗SC抗体の所見から，本例はアポクリン汗腺に由来する皮膚混合腫瘍と考えられた。